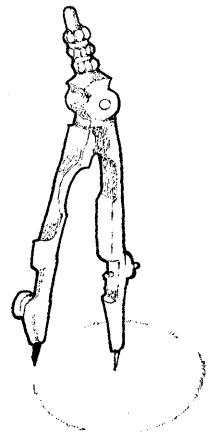


怒れる子どもたち

矢萩 恭子



保育者である私は、混沌未知なる子どもたちとの生きた日常のなかで、実にさまざまな表情、素顔、行為、表現に出会わされ、立ち合わされる。どの人に対してでも、同じように心を尽くし、身体を使い、毎日を少しでも充足した幸せな思いで満たしてやりたいと願う。とは言うものの、時に子どもたちは、容赦なく、混乱し、不安定となり、乱暴で激烈な嵐の如く、保育者である私にその存在をぶつけてくる。

じれる、いじける、泣き喚く、しがみつくと、ひっくり返る、叩く、髪の毛を引っ張る、物を投げつける、癩癩を起す、我儘の限りを尽くす、その場からいなくなる……等、怒れる子どもたちは、これでもかとはばかりに、

自己を主張し、保育者の日頃の理念やら信条やらといった概念に対してぎりぎりのところまで挑んで来るように感じられる。

数年前、三歳で入園してきた女兒Eとの一年間は、〈強風、雨、嵐、嵐、ときどき驚くほど快晴、のち、雲行き怪しく雨、雨、嵐〉とでもいった毎日であった。Eは、園生活に馴染むのに大変な抵抗を示し、安定した気持ちで遊ぶようになるまでに長い時間を要した。朝は母親からなかなか離れられず、逆に帰りは帰りがたがらず、保育者にしがみついたり逃げ回ったりした。絶えず保育者に「だっこ、だっこ」と要求してくっついていたが

り、少しでも保育者がEから離れると、狂ったように泣き叫んだ。人から言われたこと、人と一緒のことをするのをいやがり、わざと目立つことや周りの人のいやがることをしてみせる。しかし、私にはそんなEが、強風のなかで、自分の巢に帰ることも、木の枝に身を休めることもできずに飛び狂っている小鳥のように、はかなく脆い自我を抱え、保育者である私に助けを求めてきているのだと感じられるようになってきた。

九月のお誕生会を始めようというとき、私は、遊んでいた十七人のクラスの子どもたちに声をかけた。そのときEは庭で遊んでいたが、私の声に気づいてすべり台にいた女兒が、Eと一緒に連れて来ようとしてくれた。そこからこの日のEの嵐が始まった。「Eちゃん、おへやにはいらない」「やだ、いかない」「だっこー」と喚ぎ始めた。手に持っていたつわぶきをテラスに打ちつけ、犬声で喚いているうちに、自分が何がいやだったのかさえ、わからなくなってくる。ふと見ると、つわぶきの茎がぐにやりと曲がってしまっている。それを見えますま

す悲しくなりわんわん泣きながら、私にしがみついて怒る。私も、Eの気持ちを静めようとあれこれ心を砕いてはみるが、この際E一人に掛かりきりになることもできない。子どもたちをトイレに行かせ、皆をお誕生会の部屋まで連れて行き、そして今日は会の進行という役割もある。結局私は、まだ泣きべそをかいているEを脇腹に抱えた格好でお誕生会に臨むことになった。

このあと、Eは、おべんとうまでずっと、機嫌が悪く、泣き続けていた。あまり大きな声なので、同じテーブルについた男児らが、「うるさい」と言う。私は、Eにあれこれと構うのを止め、ひととおり、皆の支度を見たあと、その場をフリーの立場の者に任せて、Eを他の子どもから見えないテラスへ連れ出した。Eを膝に抱いてしばらく一対一で無言で過ごす、私は聞いてみた。「Eちゃん、どうして泣いちゃうの?」。このとき、答えが返ってきた。「だって、せんせいがむかえにきてほしかった」「そうだったの」。このことを私に理解してもらうと、ようやくEは落ち着いた。ほとんどの場合、激烈

な自己主張の仕方に気をとられて、適切にEの心を受け取るタイミングが合わずに、E自身も怒り狂い、泣き喚きながら疲れ果て、ますます自分がわからなくなってしまうことが多い。そんななかで、Eの言ったことが本当のきっかけか否かは別として、こうして気持ちをわかってもらい、満足でき気分も急速に平らかになることができたのは幸いであった。

Eの行動は、三学期に入って、落ち着きを見せるどころか、ますます激しさを増していくように思われた。少しずつ、大勢と一緒に過ごす園での生活の雰囲気馴染み、他の子どもと一緒に遊ぶ面白さも体験し始めてきた一方で、これでもかという具合に自分だけを見ていて欲しがり、認めて欲しがり、応えて欲しがって、その為には思いもよらぬ激しい行為で自分の存在を誇示し、驚いたり、困ったり、考え込んだり、本気で叱ったり、いろいろな反応を示す私の態度のなかに自分自身の不確かな存在の手応えを見つけようとするかのようであった。

当時私は、自分のなかで、Eが激しい行為で示す気持

ちの表出を「激発」と呼んでいた。激発を代表する行為は、保育室にある子ども用の木製の椅子を手当たり次第に投げとぼす行為だった。椅子ばかりでなく、Eがパニックになると、絵本や、おもちゃも空を飛んだ。そして、私の足にしがみついて大声で泣く。靴が脱げてしまつと、靴にしがみついて泣く。泣き濡れて、消耗し、そして訪れる束の間の平静。次には、また混乱に満ちた激発が繰り返されるにしても、総体的に見て、Eの心は、安心を手に入れていくように感じられた。この頃になると、私には、Eが安心して暴れまくっているように感じられたのである。コントロールできない、自分のなかの得体の知れない混沌につき動かされているのではなく、安定を求めて止まぬ自分自身の意志と心で、荒々しい行為を周りの人間にぶつけてきているような感じがした。それも周りの人間への信頼と甘えがあつてこそではなかつたらうか。ある日、激発の場面のなかで我儘をぶつけてくるEに私は聞いた。「Eちゃんは、頭がいいから何かいい考えがあるんじゃないかな?」。すると、実

際、利発で、製作活動などでは独創的な表現力を見せるEは、答えた。「Eちゃん、このことだけはかんがえられないの」と。この瞬間に私は、激発すべくして激発しているEの意志をはっきりと悟ることができたのである。

やがて、年中に進級し、担任が替わると、Eの行動は、びたりとおさまり、調和が訪れた。それが何を意味するのか、つぶさにEの行動の変化を捉えた訳ではないが、ただ言えることは、Eがひとつの発達の危機を越えたということである。それはEの心の中で起きたことではなく、そこで出会っていたさまざまな人との「関係」の中でこそ現れることができ、変わることが出来たEの成長した姿であったと思う。

次に私は、Eの激発ふりとちょうど似たような行動を示す四歳児に出合うことになる。彼は、二年保育の新入園児として幼稚園の生活を始めた。飛び抜けて身体が大きく腕力もあるRが、まさしく先程のEと同じような行

動を表し始めたときには、私には、周りの子どもたちを危険から守ることで精一杯のことも多かった。すでに満五歳を迎えているRは、それまでにかたちづくられてきた人に対する態度、ふるまいの枠も強く、容易には気持ちを通じ合わなかった。Rは自分が大勢のなかの一人であることを理解し、受け入れるまでに非常に時間がかかった。大変な甘えん坊で、保育者の身体にベタベタと触れたがり、とにかく保育者の視線が常に自分に向けられていないと満足できなかった。大人である保育者に、自分の方を向いてもらう為ならば、私の顔をむりやりつかんででも、自分の方へ向けようとした。また、子ども同士でもうまく関係を結ぶことができず、自分のやり方を無理やり相手に押しつけようと力に頼る非常に乱暴な行動が目立った。そして、気に入らないことがあると、ひっくり返って手当たり次第に物を投げつけ、暴れ、泣いた。Eと似て、園生活に慣れるにつれなお一層、激しい行動には拍車がかかっていった。何しろ、身体の大きいRのことである。怒り出したらその勢いは尋常でな

い。その度に私は、自分の身体を張っているような覚悟を自分に課すこととなった。無理に子どもを抑えつけるような関わり方を嫌悪しながらも、実際にはそうせざるを得ない場面も次々とやってきた。だが、三歳のEが相手のときとは違ってだっこすることや抱えて歩くことも難しく、また、周りの子どもたちへの影響力の大きさを考えても、目が離せない緊張の日々が流れた。

Rが何を引き起こすかわからないという心配から気持ちが張り詰めていると私自身の身体も緊張する。笑顔も嘘になる。気持ちも身体もRを受けとめきれずにいる為に、ただでさえ「自分」を一杯に抱えて漂うRは私という保育者のもとで安心することができない。そう考えた私はある日、「自然にそうは思えなくてもRをうんと好きになろう」と自分に言い聞かせた。熱く激しく自分をぶつけてくるRを駆り立てている気持ちの背景を探ることに躍起になるよりも、Rのいろいろな行動とは無条件にRを可愛がれるよう意識してみようと思ったのである。このとき、長い長い時間をかけたRとの心の応答が

始まった。

こうして振り返ってみると、怒れる子どもの保育者をも揺さぶるような激しい行動の陰には、他者との関係において、震えるように不確かな、頼りない「自己」の姿があったように思う。つまり、彼らから私に向かって放たれたメッセージは、「他でもない、この『わたし』を受け取って欲しい」、「『わたし』が『わたし』でいられるよう支えていて欲しい」というものだったのでないか。しかもその『わたし』は、新たな環境、他者との関係において非常に脆く、臆病で神経質な性質を携えている。絶えず、不安で不安定な感情の波に洗われており、岩に弾ける飛沫のように出会う者に体当たりでぶつかっては、粉々に砕け散り、安らうこともできない。この小さな心が安定と調和を見出すには長い時間と道のりを必要とするが、子ども自身がそこを抜け出るために、今このときに出会った者同志として、幾らかでも歩みを共にできるならと切に願っていると思う。

(洗足学園大学附属幼稚園)